

大震災とパン

私のゼミに、パンが大好きな女子学生がいた。彼女は広島出身だが、神戸のパンに魅了され、神戸大学に入学した。在学中はパン屋のアルバイトで学費を稼ぎ、卒業後は製パン会社に就職した。

卒業研究のテーマも、神戸のパンである。明治二年、外国人居留地に開業した二軒のパン屋に始まる神戸のパン産業の歴史を調べあげ、何人もの名だたるパン職人や大手製パン会社の営業マンにインタビューをした。京阪神の約五百人の大学生にアンケートも実施した。

それによれば、一九九五年の阪神・淡路大震災まで、大手製パン会社にとって神戸は「難攻不落の城」だったという。地元職人による個性的な手作りパンが市民生活に深く浸透し、大量生産のパンが入り込むのは極めて難しかった。震災の支援物資として大量生産のパンが入り、その後のコンビニエンス・ストアでのパン販売がそれを定着させた。もちろん製パン会社の震災支援には、感謝の言葉もない。しかし神戸の独特のパン文化は震災前の水準にまで復旧しないまま、今日に至っている。

しかし、どっこい捨てたものではない。若い大学生、特に男子学生の「舌」に神戸のパン文化は生き続けていた。神戸に住む・在学する学生は、他地域のそれに比べ、地元のパン専門店の利用率、パンに使う金額、味へのこだわり、パンについての

知識や会話の頻度が圧倒的に高いのである。女性は他地域でもそれなりにパンへの関心が高い。しかし神戸の際立った特徴は、若い男性もパンを愛し、こだわりをもっている点にある。神戸のパン文化は、大震災を経ても神戸人の味覚に生き残っていた。良質の地場産業は長い歴史を通して住民の身体やライフスタイル、嗜好やコミュニケーションをも個性化し、発達させていくのだろう。